

うになること、としている。これらを達成するための道筋はいろいろとあろうが、これらの目標全体を俯瞰して、薬の専門家としての使命感を醸成し目差すゴールやその方向を見定めるために最も有効な手段の1つが「歴史を学ぶこと」や「過去の事例を学ぶこと」であることは間違いない。

歴史を、単に過去のある時点での事象の1つとして学ぶのではなく、過去から現在への流れとして学べば、未来のあるべき姿を思い描くことがで

きる。本書には、このような執筆者らの薬学や薬史学への想い、使命感がこもっており、薬に係わる歴史を学び、楽しむことができる薬史学の入門書として、薬系大学の学生だけでなく、教員や薬剤師にもお勧めできる一冊である。

(小林 義典)

[薬事日報社, 〒101-8648 東京都千代田区神田
和泉町1-10-2, TEL. 03 (3862) 2141, 2022年11
月, B5判, 150頁, 2,200円+税]

小形利彦 著

『明治前期地方公立医学校の洋学史的研究』

～公立医学校授業科目の検討～』

小形利彦氏による本書は、明治前期の地方公立医学校、とくにその授業内容に焦点をあてた研究の成果である。明治初期には44校ほどの公立医学校が全国各地に作られたが、明治20年を境として8校のみが医学校として存続し、残りは病院のみが残ったり廃止されたりした。小形氏はこのうち40校をとりあげ、長年研究をされてきた山形医学校に加えて、15校については順天堂大学医学史学研究室所蔵の山崎文庫に含まれる規則などの同時代資料をもとに、残りの医学校については医科大学史・医師会史・地方史などの編纂資料をもとに、授業科目の概要を明らかにしている。宮城医学校(甲種)と山形医学校(乙種)の授業内容を比較してその差異を示し、山形と長野の医学校で用いられた教科書を紹介し、医制の進展と医師資格、および高等中学校医科課程設置について考察を加えている。また最後の4分の1ほどを第2部として、思い出に残る3人の人たち、工藤満寿司(ローレツに可愛がられた医師)、松田りつ(山形県初の官許女性薬剤師・看護師)、アルブレヒト・フォン・ローレツ(山形の近代医学の礎を築いた外国人医学教師)の事績を紹介している。

明治10年代に一時的に多くの公立医学校があったことは『医制八十年史』(1955)の資料編「第14表 医学校数」に示されているが、日本の医学史の

中で注目されることは少なかった。川上武『現代日本医療史』(1965)や酒井シヅ『日本の医療史』(1982)では学校数と生徒数が多かったと簡潔に紹介されている。神谷昭典は『日本近代医学の定立』(1984)の中で明治20年の公立医学校の廃止に注目し、各年度の文部省年報のデータをもとに1876～1888年の医学校数の推移をグラフで示した。板垣英治は『石川県甲種医学校の医学教育』(日本海域研究, 2009)で甲種医学校21校のリストを作成した。吉良枝郎は『明治期におけるドイツ医学の受容と普及』(2010)の中で『医制八十年史』のデータに基づいて医学校数推移のグラフを示し、東京大学医学部卒業生が全国の公立医学校に赴任して近代医学を広めたことを物語った。しかし明治初期公立医学校に焦点を当てて調査したのは、『日本医学教育史』(2012)に収載された筆者(坂井)の論考「明治初期の公立医学校」が最初である。明治6年から始まる文部省年報には、全国の学校の統計や一覧および各府県の学事年報要略が掲載されており、坂井はそこに見いだされる公立医学校を基礎として、明治4(1871)から明治20(1887)年以後に至るまで44校を同定した。そして所在地、沿革、後身、主な教員、生徒数などについて、医学校史、地方史など編纂資料を調査して報告した。そこから明らかになったのは、

明治初期公立医学校が、明治10年代という一時期に東京大学医学部卒業生を受け入れて全国に医学教育と医療を広めただけでなく、明治20年以後に8校(千葉、仙台、岡山、金沢、長崎、大阪、京都、愛知)が存続し、さらに残りの医学校もその後の日本の医学・医療の発展の礎となったことである。存続した公立病院のうち9機関(新潟、三重、岐阜、神戸、福岡、熊本、鹿児島、福島、岩手)はその後に再び医学校の母体となり現在の医科大学につながる。8機関(山梨、広島、小倉、佐賀、大分、須賀川、山形、函館)は地方の中心的な公立病院として存続し、8機関(長野、富山、福井、和歌山、島根、鳥取、高松、松山)は移管されて赤十字病院として存続し、1機関(高知)は私立病院となり、消滅したのは11機関(茨城、栃木、群馬、埼玉、浜松、堺、華浦、徳島、宮崎、青森、秋田)である。

明治初期公立医学校のうち、ある程度の部分は現存する医科大学の歴史や病院の歴史から遡ることもできるが、編纂された歴史には当てにならないところもあるし、そもそも歴史を書き残していない機関も少なくない。ましてや消滅してしまった医学校については、残されている歴史はきわめて乏しい。小形利彦氏による本書は、十分な調査

の及んでいない明治初期公立医学校について、同時代資料を多用してその実態の一端を明らかにした貴重な労作である。わが国の近代医学の普及と発展に寄与した明治初期公立医学校についての研究が、これを契機としてさらに進むことを願うものである。

著者の小形利彦氏についても紹介させて頂きたい。日本大学文理学部史学科をご卒業で、岩手大学大学院を修了し、東北大学で博士(文学)の学位をとられている。長年にわたり日本大学山形高等学校・中学校で教鞭を執り、教頭を務められた。順天堂大学の医史学研究室には、小川鼎三教授や酒井シヅ教授の時代に何度か訪ねられ、山崎文庫の資料を閲覧・複写されたという。郷土史や山形医学校について熱心に研究され、これまでもいくつかの著作を上梓されている。ながらく日本医史学会の代議員を務めてこられたが、今期をもって退任との意向を伺っている。本書に残された研究成果をありがたいとも思うし、医史学の場から退かれることを寂しいとも思うものである。

(坂井 建雄)

[霞城出版、〒990-0071 山形市流通センター1丁目5番3号、TEL. 023 (631) 2056、2023年2月、B6判、258頁、非売品]